

67年目にして念願の米国立公文書館へ



米国に乗り込み写真資料調査をして来た深堀部会長
＝ワシントン米連邦議会前にて＝

米国立公文書館は、建国以来の米国の国策にかかわる重要文書を多数保管していることで知られ、その中には当然六十七年前の原爆投下につまづる資料もある。去る二月、被爆者であり、長年被爆写真の収集活動が続けてきた深堀好敏写真資料調査部会長（八三歳）が、四日間に亘る初めての米国立公文書館での調査を終え帰国した。持ち帰った写真資料は今後の解析が待たれるが、新たな事実の発掘に期待が寄せられている。以下は深堀部会長の「米国立公文書館訪問レポート」である。

原爆写真を求めて

二月下旬、私は長崎大学教育学部の全炳徳教授と一緒^{チヨウヘツトク}に米国に飛び立った。着いたところは、首都ワシントンD.C.この時期のワシントンはとても寒いと聞いていたので、防寒対策を入念にしていた。ところが、到着してみると、この日の天候は暖冬。近年まれにみる異常だといふ。用意していたコートなどは要らなかった。

膨大な資料と格闘
米国での入手に感動する

日本を出発する時、東北地方は豪雪に見舞われ、これらと重ね合わせると、地球上の気象の急激な変化が非常に気になってきた。

米国への第一歩は、二月第三週月曜日。この日は「大統領の日」（初代大統領ジョージ・ワシントンの誕生日）とあって国民の祝日。官公庁は休み、もちろん、今回の目的地の米国立公文書館は休館だった。

私たちは、空港に出迎えてくれた米在住の全教授の友人の案内で、市街地の目ぼしい建物など半日かけて、普段触れることの少ない異文化のさまざまな見学、途中でスミソニアン博物館にも立ち寄った。広島に原爆を投下した、あのボーイングB29機「エノラゲイ」と対峙しようと入館したが、残念ながら機体はダレス国際空港に近い「国立航空宇宙博物館別館」に移されて見る事ができなかった。

今回の渡米目的は、長年、私たちが調査してきた、被爆地長崎の六十七年前の米国の資料写真。全教授は、3D（立体映像）の研究に欠かせない、主に被爆前の長崎の写真を手に入れたことだった。米国立公文書館は、市街地の中央部に本館が、北東郊外にメリーランド州立大学の近くに新館があり、私たちは新館での閲覧となった。

米国立公文書館はー

訪れてまず驚かされたことは、セキュリティチェックの厳しさである。ダレス国際空港の入国審査、ホワイトハウス周辺のセキュリティ同様、念入りだった。九・一一の影響が影を落としているのかと、思ったりした。

私たちは五日間の米国滞在中、訪米前に閲覧を申請していた長崎関係の資料（ロールフィルム二十一巻、マイクロフィルム三本、別にダンボールに収納された写真プリント十四箱）をすべて閲覧した。

戦略爆撃調査団関連写真

の多くは、当部会で保存、活用しているものと同一だった。しかし見慣れた画像でも、米国に保管されているオリジナルであると思うと、あの種の感動を覚えた。私は、回転機のロールフィルムを

の多くは、当部会で保存、活用しているものと同一だった。しかし見慣れた画像でも、米国に保管されているオリジナルであると思うと、あの種の感動を覚えた。私は、回転機のロールフィルムを

今後の調査にヒント 再び訪米活動に意欲

操作、検証しながらこの公文書館の写真管理・整理システムはおおざっぱ過ぎると感じた。例えば、フィルムは地域ごとではなく「第2次世界大戦における日本の被害効果」として総括され、各項目が細部に分かれており、検索には高度の技術が要求される。「NAGASAKI」と表示がある缶の中には、他地域の分が混在していたりで検索は容易ではない。訪米前は、原爆写真はまとめてありすぐに検索出来るものと思っ

な収蔵数と閲覧システムにあることが理解できた。

今回のワシントン訪問は、結果的に出発前に期待していたような成果はなかったが、今後の原爆写真の資料調査へのヒントを得ることが出来たのは確かだ。

今回持ち帰った貴重な画像は、時間をかけて検証し、これからの平和活動に役立たい。そして機会があれば、また挑戦してみたい。写真は原爆の実相を伝える唯一の手段だからである。

（写真資料調査部会長・

深堀 好敏）

▽お知らせ

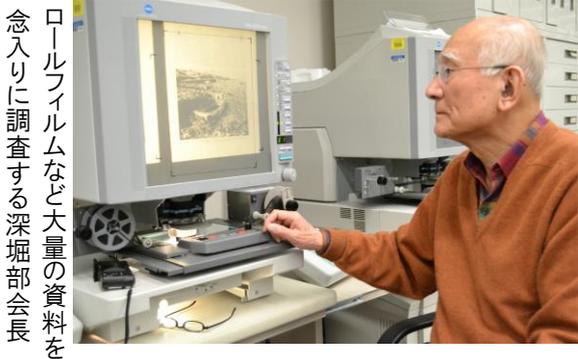
本紙第10号「爆心地標柱」の記事で使用した故木村一治氏の日記は、継承部会の濱崎均さんから資料提供を受けたものです。なお、濱崎さんは去る二月ご逝去、写真資料調査部会では、数々のご協力に感謝すると共に、ご冥福をお祈りいたします。（合掌）

ツイッター

爆心地からわずか八〇〇m、小高い丘の上にあった旧制瓊浦中学校（現在長崎西高校）の校庭片隅にあったのが高さ七mの給水タンク。原爆の強烈な爆風と想像を超える熱線を受け、鉄製のタンクの脚はまるでアメのように曲がった。だが、倒れることはなかった。

この給水タンクは、昭和二十年後半、爆心地公園の中心地碑の側に、さらに平成八年に開館した長崎原爆資料館内に移され、現在館内の展示コーナーでひっそりと被爆当時の惨状を語ってくれている。だが、この場所は少し暗く、なかなか見学者が気付きにくい。当時、校内にいた教職員と生徒約六十人のほとんどが校舎と共に犠牲になっただけに、この遺構、元に戻してこそ、原爆の威力を伝えるのではないかと、同窓生の一人として思う。

（丸田 和男）



ロールフィルムなど大量の資料を念入りに調査する深堀部会長

千葉県佐倉市にある「国立歴史民俗博物館」で、「風景の記録 写真資料を考える」という企画写真展（一月十五日まで）が開催された。この展覧会は、国内の代表的な都市を選んで、写真によってその都市の歴史の変遷をたどるといふもの。選ばれた場所は東京・江戸、東京周辺と幕末から明治初期の古写真が数多く残っている長崎である。長崎のものは、明治、大正、昭和の三時代にわたる八十点を超す写真だったが、この中には原爆で廃墟となった街の様子もあつた。原爆関連のものは、ほとんど長崎原爆資料館収蔵写真。だが、これ以外に私が所持している「長崎原爆絵はがき」十二種も展示されていた。実はこの絵はがきは、写真資料調査部会も一部所蔵、二〇〇五年長崎市民会館で開

埋もれていた資料

国立歴史民俗博物館で日の目

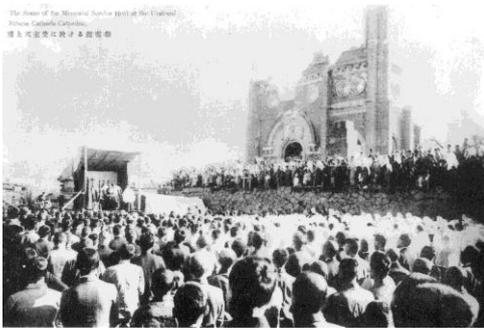
いた「被爆六十年記念写真展」の時、会場のスペースの都合で展示することができなかった資料である。この「長崎原爆絵はがき」が、一部ではある町」などの説明があるが、

「蘇った山王社の神木（樟）」は、林重男氏の写真とはかなり違う構図である。さらに「浜口町高台（記念塔建設予定地）」「破潰した市営住宅街より城山国民学校を望む」「浦上天主堂に於ける慰霊祭」などの説明文が付

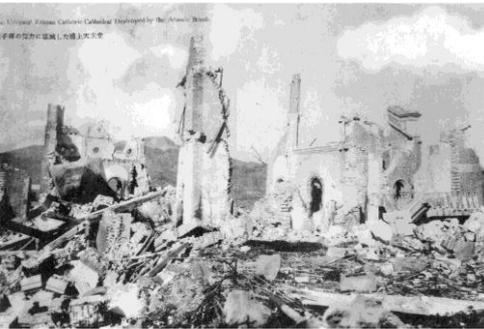


焼けて無惨な姿をみせている山王神社のクスノキ

114面につづく



廃墟の中での浦上天主堂の慰霊祭



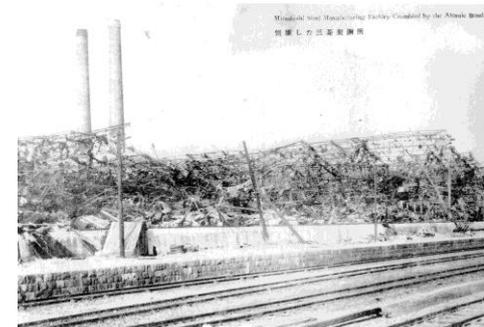
瓦礫と化した浦上天主堂



焼け野原となった長崎医大附属病院周辺



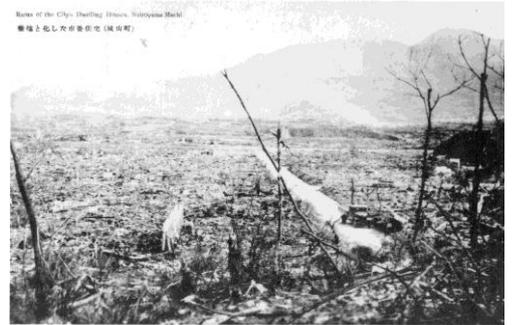
浜口町高台の惨状



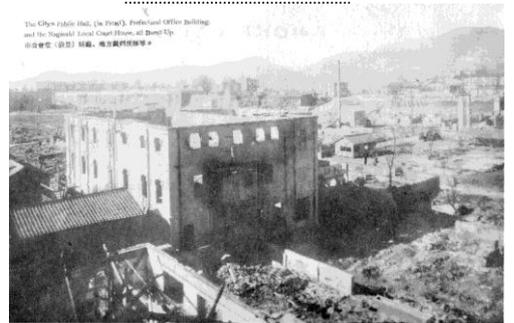
浦上駅。後ろは倒壊した三菱長崎製鋼所



破壊された城山国民学校の校舎



一面焼け野原となった城山市営住宅



長崎県庁付近の被害状況



破壊された建物の後ろに長崎市役所がみえる



廃墟となった西中町天主堂



国宝級の文化財を焼失した福濟寺

当時の長崎国際文化会館原爆資料担当者の話では、発行の詳しい経緯は分からない、との談話が載っていたように思う。しかし十数年前、たまたま古書店からの目録に、この絵はがきの存在を見つけ早速購入したが、これが今回、国立歴史民俗博物館に展示されたものである。この

私が調査したところによると、長崎市はこの写真を、市発行の記念誌で使用していることも分かった。それは「長崎市勢要覧」昭和二十四年版である。

所」と「市営住宅より城山小学校を望む」の二点が、昭和二十年十月撮影として掲載されている。しかしこの後の長崎市発行の刊行物には、この絵はがきのものを目にし

考えられる。また、これには英文の説明があることから、当時、長崎に来ていた駐留軍兵士の土産用として発行されたことも推測される。

国立歴史民俗博物館に展示され、また同時に同展の図録にも掲載された「長崎市役所発行・戦災記録絵はがき」が、全国の多くの人の目に触れたことになる。今回は個人としての出展になったが、これから我々の写真資料調査部会にこの絵はがきについての調査依頼が来るようになるのではないだろうか。

被爆クスノキなどー

昭和二十四年 長崎市が発行

絵はがきは、長崎原爆資料館や長崎平和推進協会写真資料調査部会が所蔵する写真と、すべてが異なった構図で、新しく十二点の原爆写真が確認されたことになる。

この年は「長崎国際文化都市建設法施工記念」と「市制六十周年記念」でもあり、当時の発行物としては珍しく写真を多用、巻頭グラビアに浦上駅から写した「三菱製鋼

たことがない。この頃は、連合軍占領時代で、原爆関連の文書など発行が禁じられており、占領軍政策のプレスコードによつて、米国に持ち去られたことも

今回の展覧会は、会場が長崎から遠い千葉県だけに見に行けなかったことが心残りとなった。(堀田 武弘)

今回の展覧会は、会場が長崎から遠い千葉県だけに見に行けなかったことが心残りとなった。(堀田 武弘)